

●シンポジウム

男性史の新展開 一対抗文化と男らしさに着目して

ジェンダー史が提唱され久しいものの、日本においてその研究対象は依然として女性と関連深いものに偏りがちである。しかし海外においては、1990年代から蓄積がある米国はもとより、日本でも昨年、翻訳本が刊行された Alain Corbin, Jean-Jacques Courtine, Georges Vigarello, Histoire de la virilité, Le Seuil, 2011 (邦訳『男らしさの歴史』全3巻、藤原書店) されたなどの展開をみせているフランスをはじめ欧州でも、男性史の研究には新しい展開がみられる。

ここでは、男らしさが学校教育等でのイデオロギー注入を通じて権力により構築される、というだけではなく、エスニシティや宗教、階級などにより周縁化された人々の対抗文化の中からも構築されてきたことが明らかにされている。欧米での男性史の研究動向をみると、アジア系やヒスパニック系、アフリカ系など、エスニシティにより異なる男性性が、支配層たる白人の文化とりわけそこにみられる男らしさを、柔弱なものとして否定していく中で構築される歴史的過程が検証されている。この視点にたてば、男性性を構築し再生産する社会装置は学校など体制的なものに限らず、暴力的な抵抗運動や暴動、犯罪やアウトロー集団への加入などもまた含まれることになる。このような対抗文化における男らしさの構築は、支配層によるジェンダー秩序の形成とは異なるかたちをとりつつも、男性による女性支配や性的マイノリティ排除をもたらしてきたのである。これに対して日本では、近代的軍隊編成をめぐる兵士の男性性の構築や非異性愛セクシュアリティ男性の周縁化については研究蓄積が進みつつあるものの、労働者階級・アンダークラス・アウトローの男性性や在日外国人の男性性などについての研究は手薄な感がある。

折しも、「忘れられた労働者階級の叛乱」としての右傾化・ゼノフォビアの高まりが指摘される中、ときに暴力やミソジニーと結びつきつつおこなわれる対抗的男性性の構築をどのように捉え位置づけていくべきかは、重要かつ喫緊の問題ではないだろうか。本企画は、今後の男性史研究の発展に向けての比較男性史的な議論を、二部構成にて試みる。第一部では、前述『男らしさの歴史』、とりわけ、そこでの「未開人」や犯罪者、労働者などの対抗文化における男らしさへの分析を参照軸として、対抗文化の男らしさをめぐる海外での男性史研究の成果、それに対応する日本での男性史の現時点での到達点および課題を、ラウンドテーブル形式にて研究対象地域を異にする各報告者の視点から報告する。第二部では、対抗文化の男らしさの社会的・歴史的構築過程についての具体的研究として、暴力が下層労働者の男性主体形成にいかなる意味をもっていたのかを明らかにする伊東久智氏、韓国において日本以上の激しい非正規雇用化や失業率上昇が男性復権運動や軍事主義的な保守運動の高まりといかに結びつき、若年男性の男性性形成にいかなる影響を及ぼしているのかを検討する佐々木正徳氏の2氏に研究報告をいただき、第一部での議論もふまえつつ対抗的男性性をめぐる男性史研究の成果と課題を考える。

司会

◆貴堂嘉之 (一橋大学)

◆松本悠子 (中央大学)

第一部 ラウンドテーブル：比較史的視点でみる男性史の新展開—A.コルバン『男らしさの歴史』における対抗文化の男らしさ分析を手掛かりに

◆海妻径子（岩手大学）

◆兼子歩（明治大学）

◆石井香江（同志社大学）

第二部 対抗文化の男らしさ研究、その現状と課題

◆伊東久智（早稲田大学）

「日雇い労働者の「日記」にみる男性性の「温床」：昭和初期の東京市社会局調査資料を素材として」

東京市社会局調査資料における日雇い労働者271名分の「日記」は、社会局の求めに応じて書かれた特殊な「日記」ではあるが、記載された情報をデータベース化し、これまでの研究で論じられていたような「発現」した男性性というよりは、むしろ男性性の「温床」とでもいうべき諸要素について、他の史料をも組み合わせつつ、実証的に論じることが試みる。例えば、①社会経済状況の変化と男性性との関連（第一次大戦期の日雇い労働者の男性性と昭和初期のそれとの異同）、②急増せんとする朝鮮人労働者や冬場に大挙してやってくる地方からの出稼ぎ労働者、あるいは女性など、日記に登場する「他者」への眼差し、③彼らを通った娯楽の具体的内容如何、など。特に③については、当時流行していた「安来節（やすぎぶし）」の興業実態に着目することで、労働者にとっての「疑似芸者遊び」としての側面や、都市生活者（あるいは地方出身者）であった彼らが抱く「地方的な女性の身体」への欲望といった側面を明らかにできるのではと考えている。

◆佐々木正徳（長崎外国語大学）

「現代韓国の軍事主義 — 歴史修正主義、ミソジニーとヘゲモニー」

韓国の男性性を分析する視覚の一つに軍事主義がある。軍事主義とは、何らかの紛争を解決するために集団的暴力の使用を正当化する理念のあり方であり、そうした理念を維持しようとする社会的な制度や人びとの意識のことを指す。朴正熙軍事政権期に完成したとされる韓国の軍事主義は、民主化を達成し、政権交代が実現するようになった現代の韓国においてもヘゲモニーを握り続けている。本発表では軍事主義がヘゲモニーを掴む過程から、現代に至るまでどのように権力を握り続けてきたのかを、いくつかの事例（歴史修正主義、ミソジニー）を基に検証する。

コメント

総合討論